

京都大学	博士（文学）	氏名	大坪 哲也
論文題目	デンマーク黄金時代から考察されるキルケゴールとヘーゲルの関係 —初期キルケゴール思想におけるデンマークヘーゲル主義の影響史—		
<p>本論文は、コペンハーゲン大学に入学した一八三〇年から『あれかこれか』を刊行する一八四三年二月までの青年キルケゴールの思想形成を、ヘーゲル哲学およびデンマークヘーゲル主義からの影響作用史という観点から考察するものである。それによって、初期思想をも反ヘーゲル主義者としての後の姿を読み込んで解釈してきた従来のキルケゴール研究を修正し、初期キルケゴールをデンマークヘーゲル主義の思想家として描き直すことを目的とする。</p> <p>第一部「デンマーク黄金時代におけるヘーゲル哲学の影響史」では、本論文全体の準備作業として、キルケゴールが身を置いたデンマーク黄金時代の思想状況をヘーゲル哲学の受容と変容という観点から紹介し、初期キルケゴール思想との関係において重要な思想家や論争について一定の見取り図を作成する。時期としては、一八二〇年代から一八四〇年代前半が対象となる。</p> <p>第一章と第二章では、J.L. ハイベア、H.L. マーテンセン、A.P. アドラー、F.C. シバーン、P.M. メラーといった主要人物たちの思想的立場を紹介し、各々のヘーゲル哲学に対する関係を整理する。第三章では、ハイベアによるエーレンスレイヤーへの批評を発端とする美学論争を材料として、ハイベアの美学における詩的ジャンル論やイロニーの統制的機能をめぐる考察を取り扱う。ハイベアはデンマークヘーゲル主義の最重要人物の一人だが、この考察を通して、ハイベアの美学がヘーゲルからの無自覚な逸脱を含んでいることが明らかになる。ハイベアの美的段階論は、ヘーゲルとは異なり、詩的理念は抒情詩、叙事詩、戯曲詩の順序で発展するとみなすのである。このことを踏まえた時、第二部で詳論するように、初期キルケゴールの美学的考察が徹頭徹尾ハイベアの影響下にあることが見えてくる。その影響は、それが明確に読みとれる処女作の『今なお生ける者の手記』のみならず、学位論文『イロニーの概念』、および初期の代表作である『あれかこれか』にまで及んでいる。続いて第四章と第五章では、シバーンのヘーゲル論理学批判とそれを端緒とするデンマーク矛盾論争を考察の対象とする。この論争は『あれかこれか』の執筆と同時期であるだけに、その影響関係が問われるところであるが、その詳細は第三部で論じ、ここではそれを論じるための材料を提供する。第六章では、キルケゴールの後期思想との関係がよく知られているヘーゲル主義者アドラーの学位論文『最も重要な形態における孤立した主体性』の内容を紹介する。この作業は、第二部で詳論するように、アドラーの独自のヘーゲル主義がキルケゴールの初期思想、とりわけ『イロニーの概念』におけるヘーゲル受容に深く関与していることを示すための準備となるものである。</p>			

第二部「初期のキルケゴールの著作におけるヘーゲルの影響」では、第一章で処女作の『今なお生ける者の手記』を扱い、そこにハイペアのヘーゲル主義の影響が濃厚に見られることを確認した上で、残りの第二章から第七章では、第一部の見取図を活用しながら『イロニーの概念』を詳細に読み直していく。このキルケゴールの学位論文は、従来、トゥルストルプを始めとする多くの研究者によって、ヘーゲルへの皮肉を込めた批判の書とみなされてきた。だが、第一部で提示したようなデンマークヘーゲル主義をめぐる思想的布置を背景に置いてその細部を詳細に検討することで、この論文のソクラテス解釈がヘーゲルの著作に多くを負い、ヘーゲルからの圧倒的な影響下にあることが見えてくる。そこにはヘーゲルとの不一致や批判的言及が見られるが、それは反ヘーゲル的な立場からではなく、ヘーゲルの解釈によって可能になったソクラテス理解をヘーゲル自身よりもさらに徹底しようとするキルケゴールの態度の現われとして理解できるのである。

こうしたキルケゴールの努力は、『イロニーの概念』のソクラテス解釈を単なるヘーゲルの垂流ではなく、ヘーゲルにはない優れた点を含むものとしている。それは、イロニーが本来、ソクラテスの生に関連付けられた個別的で内面的な規定であり、ヘーゲルの歴史哲学が看過した主体性の規定となるものであることを浮き彫りにした点である。実際キルケゴールは、雲のように把握し難いと評されたソクラテスについての理解がヘーゲルによって可能になり、その体系において必然化される過程を詳細に跡づけてその意義を評価する一方で、ソクラテスのイロニーは彼の個別的立場を徹底的に孤立させるものであり、そこから生じるアポリアはヘーゲルの歴史哲学によっては必然化できないものであることを強調するのである。この経緯を明確化することにより、本論文は、『イロニーの概念』におけるヘーゲル歴史哲学への支持に矛盾を見出すスチュワートの指摘に抗して、キルケゴールの立場を明らかにした。「体系における否定的なものには歴史的現実におけるイロニーが照応する」と言うように、キルケゴールはソクラテスのイロニーを主体性の規定として捉えたが、ヘーゲル体系の内部矛盾やヘーゲル的立場への批判としては捉えなかったのである。

そしてキルケゴールにとって、ソクラテスのイロニーの意味のこうした顕在化は、世界精神の進行において、主体にとって実体的生の全体的意味がもはや妥当性を失ってしまったものと受けとめられるような同時代の精神的状況と結びついていた。ここで導きとなるのが、デンマークヘーゲル主義者の一人であるアドラーの『孤立した主体性』である。キルケゴールはアドラーに導かれて、イロニーを主体性の規定とし、孤立した主体性を無限の絶対的否定性としてのイロニーに関連づけたのである。ただし、孤立した主体は、イロニーの破壊的な作用によって主体自身を消尽し、ニヒリズムに陥りかねない。それゆえイロニーの限りない否定的な力は最終的に統制されなければならない。その可能性を探ったのが最終章の「統制された契機としてのイロニー」であるが、本論文は、そこで参照軸となるのがハイペアのイロニー概念であるこ

とを明らかにした。こうして第二部全体を通して、『イロニーの概念』がヘーゲル批判の書ではなく、基本的にはヘーゲルの歴史哲学的観点とデンマークのヘーゲル主義の影響によって書かれた作品であり、そのことを踏まえて評価すべき著作であることが示されたのである。

第三部『『あれかこれか』におけるヘーゲル主義の影響』では、やはり第一部で示したデンマークヘーゲル主義をめぐる思想的布置をもとに、今度は『あれかこれか』の系統的な読み直しが図られる。まず第一章では、この著作と同時期のデンマーク矛盾論争との関係が考察される。たしかに「あれかこれか」は、排中律の保持を謳いヘーゲル批判を仕掛けたこの論争における反ヘーゲル陣営のスローガンであり、キルケゴールがそれを知らなかったことはありえない。しかしだからといって、このタイトルはヘーゲル批判への一面的な加担を意味するものではない。矛盾論争で議論された最高の思惟原則としての同一律の意味について、キルケゴールは、ヘーゲルを批判する見解とヘーゲル主義の見解を併存させている。すなわち、経験的かつ倫理的な次元では「あれかこれか」が排中律の妥当性と共に保持される一方で、思弁的媒介の領域ではヘーゲル的な第三項による総合の立場が認められるのである。これはハイペアによる反ヘーゲル主義陣営への反批判に従ったものである。

このことを確認した上で、第二章から第四章では、前半の美学的著作の読み直しが遂行される。日誌や読書ノートなども援用することによってそこで明確になるのは、この時期のキルケゴールが、従来想定されていた以上にヘーゲル美学に精通し、その『美学講義』に広範に言及しつつ思索を展開していることである。たとえば、処女作では追隨していたハイペアのヘーゲル主義美学に対して、そのヘーゲルからの逸脱を指摘し修正していると解しうる箇所が見られる。さらには、「古代悲劇の現代悲劇への反照」と題された箇所についても、ヘーゲルの現代悲劇の解釈がアリストテレスの古代悲劇の解釈を反照する構造をとることを鋭く読みとった上で、キルケゴール自身の立つ現代からアンティゴネを「創作」する、という手の込んだ仕掛けが施されている。この現代版のアンティゴネの造形は、ヘーゲルの『ハムレット』解釈に影響を受けつつもキルケゴールの内面史に連動してもおり、中期の『不安の概念』へとつながっていく面を持つのである。

第五章と第六章では、後半の倫理的著作の読み直しを行う。「結婚の美学的妥当性」と題された箇所では、ロマン的人生観を部分的に肯定しつつ倫理的人生観の意義を説くヴィルヘルム判事の立場が打ち出される。判事によれば、厳格な倫理的人生観は、カントの結婚契約説のように、「悟性結婚」に陥る限りで一面的な欠点があり、結婚制度において愛を充足することができない。そうして、美的か倫理的かという「あれかこれか」を克服するのが全ての対立を統一する愛の弁証法であることが暗示される。この点において、テキストの全体がヘーゲル弁証法のトリロジーに従っていることが見てとられるのである。さらに「美と倫理の均衡」と題された箇所では、両者の区別

と関係が、上記のハイベアの立場を下敷きにして展開されている。すなわち、歴史の運動の総体をとらえるヘーゲル哲学の立場と歴史に対する個人の決断の意義の双方を区別して意義づけた上で、最終的にはこの主体の決断をも歴史の運動の中に位置づけるヘーゲルの歴史哲学的立場が維持されるのである。こうして、デンマークヘーゲル主義の影響という要素を組み入れて読み直すことで、『あれかこれか』についてもまた、ヘーゲルの歴史哲学的観点とデンマークのヘーゲル主義の影響の下で書かれた著作であることが示されるのである。

以上のように、デンマークヘーゲル主義からの影響作用史という視点を導入することによって、本論文は初期のキルケゴールとヘーゲル哲学との関係の全面的な見直しを可能にした。そこから得られた洞察は以下の三点にまとめられる。第一には、キルケゴールのヘーゲル受容がハイベアのヘーゲル主義を経由して進められたものであり、それによってデンマーク黄金時代の文化的諸問題と結びついていたことである。キルケゴールの思索は、まずは彼の生きた時代の文化的課題に応答する所から始まったのである。第二には、初期のキルケゴールにとって、美学や論理学に関係する諸問題は、基本的にはヘーゲル主義の立場から回答すべきものとして受けとめられていたことである。この点において、初期のキルケゴールはデンマークヘーゲル主義者の一人に数えるべき存在なのである。第三には、初期と同じ仕方ではないにせよ、中期以降の実存思想もまた、デンマークヘーゲル主義との影響関係によって形成されたことである。以上の影響史的考察は、従来の子ルケゴール像を一新するものであり、今後のキルケゴール研究にとって重要な意義を持つであろう。

(論文審査の結果の要旨)

キルケゴールをめぐる国際的な研究状況は、とりわけ今世紀に入ってから大きく変動しつつある。生誕二百周年にあたる二〇一三年に、デンマーク語の批判校訂版全集が完結した。それ以前から、キルケゴール研究がドイツ語訳テキストに拠って行われていた時代はすでに遠くなり、デンマーク語原典による研究がスタンダードになってはいたが、全集完結の前後から状況はさらなる進展を見せた。すなわち、日記や研究ノートといったキルケゴールの遺稿が新資料として盛んに活用されるようになったこととも関連して、キルケゴールが身を置いた一九世紀中盤のデンマークの活力あふれる文化的状況（「デンマーク黄金時代」）の内にその思想を位置づけ直し、この状況からの「影響作用史」的な視点を組み込んだキルケゴールの諸著作の再解釈の企てが試みられるようになってきたのである。

本論文は、こうした最新の研究動向をわが国でいち早く取り入れ、その手法を駆使して初期キルケゴールの思想におけるヘーゲルとの関係を描き直そうとしたものである。ヘーゲルの徹底的批判者としてのキルケゴールの姿は哲学史上の定型となっており、学位論文『イロニーの概念』や『あれかこれか』といった初期キルケゴールの著作についても、従来の研究ではすでに反ヘーゲル的立場をとるものと解されることが多かった。本論文は、上記の手法によって、従来は反ヘーゲル主義や一面的なヘーゲル理解に基づいているとみなされていたこの時期のテキストが、実は当時の「デンマークヘーゲル主義」のその都度の状況を介して受容されたヘーゲル哲学の圧倒的な影響下にあったことを実証しようとしたものである。ヘーゲル哲学からデンマーク黄金時代、さらにそこから初期キルケゴールへの影響作用史的連関を網羅的にたどることによって、従来解釈を一新し、初期キルケゴールをデンマークヘーゲル主義者の一人として描き直したこと、それが本論文の最大の意義である。

第一部は、本論文の課題に取り組むための不可欠の前提として、一八二〇年代中盤から四〇年代初頭までの「デンマーク黄金主義におけるヘーゲル哲学の影響史」の見取図作成にあてられる。そこでは、デンマークヘーゲル主義とそれに拮抗する反ヘーゲル陣営について、ハイベア、マーテンセン、アドラー、シバーン、メラーといった主要関係人物とその思想が紹介され、彼らに関わった美学論争や矛盾論争の経緯をたどることによって人物相関図が作成される。その上で、コペンハーゲン大学入学から『あれかこれか』の刊行までのキルケゴールについて、その中で誰と関わりどのような位置を占めていたのかが時期ごとに詳細に描かれていく。こうした当時のデンマークの思想状況の網羅的な紹介は、これまでわが国ではほとんど前例のない作業であって、そこに含まれる偏りは今後の研究によって修正されていかねばならないとしても、それ自体が学術的意義の大きいものであるといえる。

第二部では、第一部で作成した見取図を縦横に活用しながら、『イロニーの概念』を詳細に読み直していく。この学位論文は、従来トゥルストルプを始めとする多くの研究者によって、ヘーゲルへの皮肉を込めた批判の書とみなされてきた。だが、デン

マークヘーゲル主義をめぐる思想的布置を背景に置いてその細部を詳細に検討していくことで、この論文のソクラテス解釈がヘーゲルの著作に多くを負い、ヘーゲルからの圧倒的な影響下にあることが浮き彫りにされる。そこにはヘーゲルとの不一致や批判的言及が見られるが、それは反ヘーゲル的な立場からではなく、ヘーゲルの解釈によって可能になったソクラテス理解をヘーゲル自身よりもさらに徹底しようとするキルケゴールの態度の現われとして理解すべきだとされるのである。そして、この意味でのヘーゲルの徹底を導いているのがシバーンとアドラーであることを、論者はテキストの細部に即して明らかにしていく。ここでの論展開には牽強付会気味の箇所がないではないが、本論文のようなアプローチによって初めて可視化される筋道であることは間違いない。

第三部では、同様の手法によって『あれかこれか』の詳細な再解釈が図られる。この書の題名は、同時期の矛盾論争における反ヘーゲル主義陣営のスローガンを暗示しているように思われ、キルケゴールのヘーゲルからの離反を証示しているかのように見える。しかし、論者は考証を重ねてこの見方を退け、前半の美学的著作と後半の倫理的著作の関係が暗にヘーゲル的図式によって規定されていること、にもかかわらず両者の関係が「あれかこれか」という排中律的定式を得るのは、反ヘーゲル主義陣営にくみするからではなく、むしろこの陣営に対するハイペアの反批判を下敷きとしてのことだという点を解き明かしていく。この解釈によって、仕掛けに満ちたこの複雑な著作の謎が全て解明されたとはいえないが、この著作をめぐる今後の研究において参照されるべき有力な読みを各所で展開できており、本論文の手法の有効性がよく示されているといえる。

このように評価すべき点を多くもつ労作であるが、本論文にも問題がないわけではない。反ヘーゲル主義者キルケゴールという固定イメージを砕き、デンマークヘーゲル主義者の一人として初期キルケゴールを描き直すという本論文の主旨は一貫しているが、この一貫性が論を単調にする方向に働いている箇所も見受けられる。その結果、初期のテキストにも明らかに見てとられるキルケゴールの独自性が後景に退いているように思われる。また、デンマーク黄金主義の主要人物たちの思想紹介には、まだ論者自身十分に消化できておらず、理解しにくい説明も散見する。しかし、こうしたことは、論者が前例のごく少ない課題に取り組んだことによるものであり、今後の研鑽によって克服されていくことが期待できる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2021年1月22日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。